



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 開発技術者がプロジェクトマネージャになるとき(A)

5

## ～小惑星探査機「はやぶさ2」と津田雄一～

2020年12月。ケースライターは、小惑星探査機「はやぶさ2」のサンプルリターン成功のTV報道を目にした。未知の宇宙空間における探査機運用は、6年程にわたったという。プロジェクトチームのマネジメントは、どのようなものだったのだろうか。ケースライターは、関心を抱いた。

10

報道でコメントを述べていた「プロジェクトマネージャ（以下、プロマネと表記）」は、津田雄一氏。ケースライターは早速、はやぶさ2に関する新聞や雑誌の記事、書籍等を調べ、津田氏のマネジメントについて考えるための記述を抜粋することにした。

2020年12月6日未明。日本の小惑星探査機はやぶさ2号機（通称、はやぶさ2）が宇宙空間で切り離したカプセルが地球の大気圏に突入した。（中略）

15

カプセルの中には地球から約3億kmも離れた宇宙空間に浮かぶ小惑星「リュウグウ」の岩石が納められている。これを詳しく調べることで、生命誕生と太陽系の成り立ちの秘密を探ることができるというのだ。世界の研究者が帰還を待ちわびていた。（中略）

しかし、この宇宙の旅は決して簡単なものではなかった。

リュウグウは人類未踏の小惑星だ。それどころか詳しい形も地表の様子も地球からはほとんどわからない。手探りの旅だ。実際にたどり着いてみるとリュウグウは岩石だらけの「怪物」だった。その表面は無数の岩塊（ボルダー）に覆われていた。初号機が行った「イトカワ」も岩石が多かったが平地もあった。ところが、ここは着陸できる地点がほとんど見つからない。そのまま着陸しようものなら機体は鋭い岩塊にあたって壊れてしまう。初号機の経験をもとに開発された最強ともいえる探査機はやぶさ2をもってしても、小惑星リュウグウは手強かった。（中略）

20

はやぶさ2は果たしてこの困難を乗り越えられるのか。ミッションに挑んだのはJAXAの宇宙科学研究所(宇宙研)の若き科学者、津田雄一とそのプロジェクトチームだ。津田は30代でチームをまとめるプロジェクトマネージャに抜擢された。（後略）

25

『ドキュメント「はやぶさ2」の大冒険』、NHK 小惑星リュウグウ着陸取材班、講談社（2020）、p.2-4

このケースは、討議資料とするために、巻末に示す参考文献をもとにして公開情報によるケースとして作成した。作成したのは高木晴夫、市村真納、鶴ヶ谷典俊である。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/> から。

30

Copyright © 高木晴夫、市村真納、鶴ヶ谷典俊（2022年6月作成）